

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第96回

シビックテックの今と未来が見えるCode for Japan Summit

● Civic Tech Zen Chiba 代表 白澤 美幸 (しらさわ みゆき)

9月28、29日の2日間、Code for Japan Summit 2019 in Chiba^{注1}を開催しました。

Code for Japan Summitは、毎年全国各地を回ってその地域のブリゲード(各地にあるCode for XXXという団体)が共催をします。筆者が座長をしているCivic Tech Zen Chiba^{注2}は、千葉県内でシビックテック活動をしている団体のアライアンスです。今回は共催という立場で、会場選定からイベント運営までを行いました。Code forとしてはおそらく初めてであろうブリゲード登録のない団体も、中

心メンバーとして運営に携わる形となりました。

結果から報告しますと、今年のCode for Japan Summitは名実ともに、シビックテック団体によるシビックテッカーのためのシビックテックサミットになりました。台風15号による被害が千葉県の広範囲で起き、スタッフも実際被災をしながら地域の救援活動が続ける中での集客・準備でした。そういった中1,000人を超える方々にご来場いただけたことはシビックテックへの期待値そのものだと思います(写真1)。

注1 <https://summit2019.code4japan.org/>

注2 <https://sites.google.com/view/civictechzenchiba/>

▼ 写真1 参加者、スタッフを交えた集合写真



シビックテックの今と未来が見える Code for Japan Summit

「シビックテックがわかりにくい」を減らしたい

「シビックテックとは何か」という話をするとき、多くの場合は市民活動と区分されます。しかし、シビックテックを説明するのは容易なことではありません。

多くの市民活動には何かしらの目的、手段があります。たとえばゴミ拾いをすることで地球をきれいにしたいという趣旨の市民活動団体があったとすると、その団体は地球がきれいになることが目的であり、それを成し遂げるための手段はゴミ拾いでしょう。活動範囲が広い団体であればあるほど、目的と手段が明確であることが多く、活動範囲が広がる要因の1つであるといえます。

一方、シビックテックは目的でもなければ手段でもありません。それは「概念」に近く、外から見たとき何をやっているのかわかりにくいいため、説明にとっても苦勞します。シビックテック活動が概念である理由は、活動内容が個々人の持っているスキルに左右され、それをよしとしているところにあります。Code forのブリゲードを取ってみても、団体それぞれのメンバーや特技によって、手段や目的までもが異なります。

今回、本サミットの運営をしようと思ったのは、シビックテックのわかりにくさをどうにかしたいという想いからでした。

Spark Joyする

毎年サミットにはテーマがあります。今年は「Spark Joy！」(ときめき)でした。

シビックテックを含む市民活動は、自分たちの未来をよくすることを目指しています。ですが、それが格好悪いこと、たいへんなことだと思っている人もいます。また、シビックテック活動をしている我々も、自分たちの活動のどこが課題か、たいへんなところはどこか、というネガティブな思考に覆われてしまうことがあります。

そんな人に、初めてシビックテックを知ったと

き、多くの人が感じたであろう、ときめきを思い出して伝えてほしい。シビックテックを続けたいと思う人が1人でも増えてほしい。そんな想いをテーマに込めました。

根幹のテーマ ——シビックテックの多様性

サミットではシビックテックに関連したプログラムを多数開催しました。これには2つの理由があります。

1つめは、シビックテック活動にさまざまな選択肢があることを体感できることです。先述のとおり、シビックテックは活動をしている人の立ち位置やスキル、問題意識などにより目的や手段も大きく異なります。どれか1つを逃げれば地域課題が解決するということではなく、実にさまざまな課題があり、アプローチ方法があるのです。

人の課題が多様であれば、解決に導くアプローチも多数あるわけですが、Code for Japan Summitに來られた方はおわかりになるとおり、当日のサミットには本当に多くのアプローチ方法や、新しい挑戦をしている事例の発表がありました。Code for Japanにはそれだけ、経験や実績の豊富な先人がジョインしているのだと思います。

2つめは、今回のサミット自体が大きな学びの場を成しているという点です。

学びというのは非常に能動的な作業で、労力を提供することで成り立ちます。たとえば、100の投資すると100の対価を得られるサービスがあるとしみましょう。ここでサービスを受ける人が10の労力を提供すると、それによりサービスに10の付加価値がつき、合計で110の対価を得ることができます。

今回のサミットでは、多くのプログラムが参加型もしくは登壇者に近いもので、気軽に相談ができるような環境を作りました。それにより参画(労力を提供)してくださった参加者は、能動的にサミットに参加し付加価値のあるサービスを受けられます。自ずと、学びの場の提供という役割を果たしていたというわけです。

Code forの活動は、手段や目的が決まっているボランティアと異なり、活動が多様であるという特性

により大きなリラーニング(学び直し)の機会を提供していると思います。

シビックテック×EdTechで 見えてくる可能性

サミットではいくつかのテーマに沿ったプログラムを提供していました。その1つが教育です。教育改革が叫ばれて久しい中、いったい何をすればいいのか、身近にどんな改革方法があるのか。教育環境の多様化を図るには、具体的にどんな事例があるのか。筆者は、この答えの1つにシビックテックがEdTechと伴奏することで見えてくる未来があると思っています。

教育現場には、地域の市民の力を借りながら学校教育を豊かにする歴史がすでにあります。PTA、放課後教室などが具体的な例でしょう。今回、是々非々にEdTechを企画に盛り込んだのは、教育を学校の中で請け負うのだけではなく、地域の人の力を借りることで子どもたちの教育の多様化、質の向上、学校の負担軽減につながるのではないかという想いからでした。

その内容に共感いただき、1日目のランチセッションでは、デジタルハリウッド大学の佐藤昌宏氏、熊谷俊人千葉市長、GROOVE X株式会社の林要氏が登壇され、EdTechの可能性について話をしていただきました。

2日目の基調講演ではアクセントの工藤卓哉氏によるデータアナリティクスの最前線についての講演があり、「アメリカでも学校の教え方が絶対であるという傾向がある。子どもたちには、さまざま

な解決方法があるということを小さいころからぜひ知ってほしい」とのコメントをいただきました。また、子どもたちの教育の多様化へ寄与したいと、ご講演の費用すべてを寄付していただきました。

この2日間のメインプログラムは、いずれも本当に印象深いものでした。この場を借りてお礼を申し上げます。

未来の姿が見える場所

「ともに考え、ともにつくる」というスローガンは気持ちの持ちようだけの概念だと言われることもあります。それが許容される世界というのが、正しくCode for が見ている未来なのだと思います。

ともに考えるということは、すでに課題や解決方法、仕様が決まっているのではなく、考察や議論をする場があるということです。

ともにつくるということは、既存のものだけではなく新しい物事を一緒に創り上げる場があり、それらが試験的に行われることもあるため、失敗も許容されるということです。

そのためには、失敗を受け入れる文化であったり、アジャイル開発を行う習慣であったりと、社会全体の構造や価値観も変革していく必要があります。本サミットでは、官民関係なく失敗談や開発状況をみんなが受け入れ、より良くしようという空気が流れていました。参加者の方は、未来にある共生、共創の形が少しだけ垣間見えたのではないのでしょうか。

今の自分の課題が見える場所

シビックテック活動はその特性がゆえに、自分の現在の状況、課題が見えにくいことが多くあります。目的手段が明確でないがために、活動自体の意義が見えなくなってしまうこともあるのです。

今回のサミットでは、同じシビックテック活動をしている方同士が、不安や課題を話し合うワークショップを開きました(写真2)。

自分の状況や課題が明確になり、次のアクション

▼写真2 シビックテックの悩みを話し合う座談会的一幕



シビックテックの今と未来が見える Code for Japan Summit

を取りやすくなる。これもサミットで得られたことの1つだと思います。

シビックテックが変わる

ここ数年で、我々の身の回りもICT化が加速度的に進んできました。たとえば総務省の平成30年版情報通信白書によれば、2010年では9.7%の世帯でしかスマートフォンが持たれていなかったのが、2017年では75.1%まで所持率が上昇しました^{注3}。

2011年の東日本大震災のとき、ご近所のポータブルTVの小さな字幕でしか震災の情報を受け取れなかった筆者は、2019年の台風15号の現状を、SNSを通して受発信しています。今回のサミットにどうしても、と導入した電子決済システムも、義援金や商品購入の半数以上で利用する結果となりました。

また、シビックテックの盛り上がりを見てもわかるように、社会貢献の形も変わろうとしています。シビックテックは、何をどのように成し遂げるか検討するところからの参画を意義としています。この特徴によって、2、30代の若年の参画者が多いという傾向があります。トップダウン型組織の市民活動とは異なり、手段・目的を自分たちで考える新しい市民活動の形は、自分が使える時間、自分たちでできること(手段)、自分たちのやりたいこと(目的)をベースに社会貢献ができます。

働き方改革と同じように、社会貢献の方法も大きく変わろうとしているように思います。

市民参画の形を再考する

今回のサミットでは東京都副都知事になられた、元ヤフー株式会社の宮坂孝氏にお越しくいただきました。国全体がICT化するには、行政機関のICT化は避けては通れませんし、それゆえ既存の業務との融合や革新が必須となります。宮坂氏はその中心で、今まさに現場を変えようと旗振りをされています。

▼写真3 経済産業省のデジタル化推進マネージャーをパネラーに迎えたセッション「朝まで生テレビ風 激論! デジガバ担当者の本音曝します」の一幕



サミットを終えて、シビックテックと行政の連携を再度意識すべきだという声を何度か聞きました。新しい社会貢献の形と行政の連携は、アプローチが大きく異なるので、一筋縄ではいかないのも事実です(写真3)。しかし、シビックテックとGovTech^{注4}がともに動く、本当の意味での官民連携が可能になったとき、シビックテックが市民権を得ることができ、デジタル社会を我々が生きることになるのではないかという感覚を、今回参加した人は、随所で感じたのではないのでしょうか。

Code for Japan代表の関治之さんがサミット当日にお話をしていたとおり、千葉市長に呼ばれてCode forの活動報告をしてから約6年、市民主催によるサミットへ市長をお呼びできたのは1つの大きな節目だったように思います。それと同時に、社会貢献のあり方が大きく変わろうとしている今、再び原点に戻り市民と行政の共創のあり方を、考える時期が来ているように思います。

まとめ

来年、Code for Japan Summitは愛知での開催が決まっています。さまざまな挑戦をしている愛知で、どのような形のサミットが展開されるのか、そこまでにシビックテックという潮流がどこまで進化するのか、期待を持ってその中にいたいと思います。SD

注3 第2部 基本データと政策動向 第2節 ICTサービスの利用動向 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd252110.html>

注4 ICTの力を使い、行政機関をよりよくする活動や作業のこと。